

## 自然免疫における液性応答と細胞性応答

中西 義信

**Introduction to the Bibliographic Symposium: Humoral and Cellular Responses  
in Innate Immunity**

Yoshinobu NAKANISHI

*Graduate School of Medical Science, Kanazawa University, Shizenken, Kakuma-machi,  
Kanazawa City 920-1192, Japan*

(Received August 24, 2006)

本号に掲載されている数編の論文は、2006年3月末に仙台で開催された日本薬学会第126年会でのシンポジウム「自然免疫における液性応答と細胞性応答」での講演内容を、各講演者がまとめたものである。

われわれの体に備わっている感染防御機構は、自然免疫と獲得免疫とに大別される。両免疫とも可溶性タンパク質が中心となる液性反応と免疫細胞が直接に働く細胞性反応とからなり、いずれの反応も体内に侵入した病原微生物を感知した免疫細胞の働きにより誘導される。自然免疫が獲得免疫の原型であるとする考え方はとうの昔に葬り去られ、両免疫とも有する生物では自然免疫の働きなしでは獲得免疫が誘導されないことが分かってきた。さらに、獲得免疫の特徴と考えられてきた‘特異的な（一対一対応の）’免疫応答が、自然免疫にも存在する可能性

が生じている。このように、感染症に対する宿主防御反応としての自然免疫の重要性は増しつつあり、この現象のより深い理解が求められている。その一方、宿主の免疫応答を回避する戦略を獲得した微生物の存在が示され、さらにその微生物戦略を打ち破る宿主反応も分かってきた。このように、生体内では免疫誘導を巡って宿主と微生物との争いが繰り広げられているのである。自然免疫機構の基本的部分を理解し、さらに微生物による免疫回避の仕組みを解明することにより、人類が感染症から逃れるための新しい医療戦略が開発されると期待される。本誌上シンポジウムでは、自然免疫の仕組みに関する新知見を紹介するとともに、感染症を巡る微生物と宿主の知恵比べを浮き彫りにする。なお、オートファジーに関する講演を行った大阪大学の吉森氏は本号での論文執筆には加わっていない。